

2026年度

J F r M 小 論 文

注 意

1. 試験開始の指示があるまでこの問題冊子を開いてはいけません。
2. 解答用紙はすべて黒鉛筆または黒芯のシャープペンシルで記入することになっています。鉛筆またはシャープペンシル・消しゴムを忘れた人は監督に申し出てください。（万年筆・ボールペン・サインペンなどを使用してはいけません。）
3. この問題冊子は 4 頁までとなっています。試験開始後、ただちに頁数を確認してください。
4. 解答用紙にはすでに受験番号が記入されていますので、あなたの受験票の番号であるかどうかを確認してください。
5. 解答は解答用紙の指定された解答欄に記入し、その他の部分には何も書いてはいけません。
6. 解答用紙を折り曲げたり、破ったり、傷つけたりしないように注意してください。
7. この問題冊子とメモ用紙は持ち帰ってください。

次の文章は、信田さよ子『なぜ人は自分を責めてしまうのか』の引用である。「根源的受動性」に対する筆者の考えを要約してあなた自身の意見を論じ、それを踏まえて「孤独」に対するあなた自身の考えを記しなさい。1000字前後で解答すること（この設問は、独創的発想力、問題発見能力、論理的思考力、文章表現力、知的素養などをみるものである）。

自責感というのは自分を責めることなんだけど、自分に責任があると感じることも同じです。自分にすべての責任があるという感覚。

家族の中でもっとも小さく弱い存在の子どもが、ひそかに「自分の責任なんだ」「自分は悪い子だからなんだ」と思って、その家族の中を生きてる。それがいかに残酷なことか、もっと多くの大人は気づくべきではないかと思います。

子どもは生まれさせられる。この事実を外してはいけないと思う。

いつとき産科の待合室に、「子はあなたを選んで生まれてくる」という本がいっぱい置いてあったそうです。それは言っちゃいけない、いちばんよくないと思う。

なぜなら、子どもは責任ゼロで生まれてくるんですよ。親は妊娠したから産むだけでしょう。つわりも苦しいし、出産も痛いし、子育ても大変だから、そこに大人がいろんな意味を、勝手に付け加えるんですよ。

子どもを産んだというのは、子どもは生まれさせられたということです。その結果「産んでくれてありがとう」と言われる子育てをすればいいだけの話です。

先日お亡くなりになりましたが、私がとても尊敬していた、評論家の芹沢俊介さんという方がいます。

彼は、子どもの「根源的受動性」ということを、ずっとおっしゃっていました。芹沢理論のひとつの根幹です。言い換えると、「ぜんぶ受身」ということですね。子どもは、何ひとつ選んでいない。性別も、名前も、顔も、身長も。生命すら選んでいない。

この根源的受動性というのは、子どもとともに語られないといけない。芹沢さんによれば、子育てにおいて子どもは、「解決の見通しがない世の中に生まれさせられたんですよ、あなたは」ということを誰かに承認されなきゃいけないんです。

承認するのはだれか。第一は親だと思います。

こういう世の中だけど、私はあなたを産みました。あなたに責任はありません。産んでしまったことを、私はちゃんと認めてますよ。これを、「根源的受動性の承認」と芹沢さんは言っている。

だけど親は「産んでやった、ありがたいと思え」「お金をはたいて塾に行かしてやって大学まで出した。だれのお金だ」と言う。だけど、根源的受動性を考えたら、そういうこと

は言えない。言ってはいけない。

そういうふうに認めてもらうことで、芹沢理論によると「イノセンスの解体」が起きる。「自分には何の責任もない」それが承認されることで、はじめて「自分の人生は自分が主体なんだ」「痛い、お腹がすいたっていう感覚は、私のものなんだ」と、そういう自分を受け止められるようになる。

こう、芹沢さんは言っています。

愛着障害という言葉が流行ってます。この言葉は好きに使っていただければいいけど、愛着とは、本来はこの根源的受動性の承認を意味してるんじゃないかと思います。

愛着という言葉は、世間的には、「ぴったりくっついたり、スキンシップしたり、そうすることで子どもは安定する」みたいに、ちょっと誤解されています。

だけどそうではなくて、親は子どもを産んでしまったこと、それを認めることが愛着であり、子どもが、自分の人生を自分で背負えるようになる出発点なんですね。

小児科医・精神科医のウィニコットは、子どもは誰かといるときにしか一人になれないと言っています。子どもはずっと一人でいたら、一人と思えない。

飛躍するようですが、私は、依存症の人の話を聞いててそう思うんです。

アルコール依存症の人がお酒をやめたり、薬物依存症の人が薬をやめたりして、離脱症状も治まって生活も安定してきたときに、すごく寂しくなる。初めて自分が一人に思えて、孤独を感じられるようになる。つまり「私は一人だ」と思えるのって、ものすごい高級な感覚なんですよ。「孤独感にさいなまされてる。これは信田に言わせれば、ハイグレードなことらしいぞ」と思ってください。

だから、孤独は孤立とはちがう。孤独は、誰かと一緒にいることでしか生まれない。「結婚して初めて孤独を味わった」というフレーズが、結婚生活を批判する意味でよく使われます。だけどそうじゃなくて、結婚して、さまざまなことをともにしても、やっぱり私は私なんだと。これは、結婚が教えてくれる教訓なのかもしれません。

(信田さよ子『なぜ人は自分を責めてしまうのか』による)

【以下余白】